

日印共同シンポジウムの意義について

川田 洋一

「ラマチャンドラン生誕百周年」を記念して、「記念委員会」と東洋哲学研究所との共同シンポジウムが、くも盛大に開催されましたことを、主催者の一人として、関係者の方々に深く御礼申し上げます。

私は、生涯に一度、南インドにて、高齢のラマチャンドラン博士にお会いする機会を得、その人格にふれ、スピーチを聞き、一緒にインド食を堪能する幸運に恵まれております。それは、一九八八年一月七日、池田SGI会長が「ラマチャンドラン賞」を、インドの平和教育・文化振興団体である「開発教育ナショナル

センター」から贈られたことであります。池田SGI会長の名代として池田博正副会長が受賞され、私もSGIの一員として、参加することができました。

この「賞」は、故マハトマ・ガンジーの高弟であり、長年にわたり非暴力運動を推進してきたラマチャンドラン博士の業績にちなんで、一九八五年の「国連国際平和年」に制定されたものであり、平和と民族の相互理解の推進に顕著な業績のあった世界の文化人・教育者に贈られるものであり、この年、池田SGI会長は、日本人としてはじめての受賞となりました。

会場には、SGI会長の受賞を記念しての「青年のための非暴力セミナー」に参加しているインド二十七大学の学者、学生や市民が五百名つめかけておりました。M・ジェイコブ、インド政府議会担当国務大臣や、ガンジークラム・ルーラル大学のイベントラ・クマール総長、本日、ここにいらっしゃるラダクリシュナン博士も参加しておりました。

授賞式を締めくくって、代読されたSGI会長の受賞スピーチを受けてのラマチャンドラン博士の挨拶が行われました。八十二歳の高齢であつたとお聞きしておりましたが、平和への尽きせぬ思い、そして日本の池田SGI会長との平和教育・平和創造への共戦を、力強い口調で語られました。その博士の情熱のスピーチは、今も、私の耳朶から離れることはありません。スピーチの中で、博士は、「私がこの小さな大学で試みていることは、非暴力で『力』を包囲することであり、新たな『平和と正義の世界』を創造することであり、す。この偉大な実験的冒険こそ、私達の人生の使命であります」と話されました。

今日、この席に参加しておられるラダクリシュナン博士、シスター・マイティリ氏をはじめとする「委員会」の方々は、まさに、師・ラマチャンドラン博士の偉大なる実験——「平和と正義の世界」を創造する非暴力の戦いを継承されている使命の方々であります。

この共同シンポジウムは、テーマにもかかげましたように、「非暴力と平和の世紀」を創出するために、ガンジーの魂を实践されている方々をお迎えして、同じくインドに発し、東洋全域に流布した仏教が、日本において日蓮仏教として、今日、池田SGI会長のもとに全世界へと展開しているSGIのメンバーが、ともに人類平和のために貢献する「共戦の道」を話し合う場であります。

さて、本年は、日本の広島、長崎に原爆が投下されてから六十周年を迎えております。一九九二年八月六日、広島投下のメモリアル・デーに、ラダクリシュナン博士は日本でSGI会長と会見しております。その時、博士は、「ガンジーは、広島ニュースを聞いてしばし瞑想し、沈黙したといひます。ガンジーは、いか

なる暴力も否定しました。そして主張しました。「魂の力」は原子爆弾よりも強いと」と述べられ、そして、「この誰もがもつ『魂の力』を引き出し、平和を生み出していく——これこそ池田会長が進めておられる運動です」と、SGI運動にも言及されました。

マハトマ・ガンジーは、原爆投下に際して『ハリジヤン』で、「人類は、非暴力によってのみ暴力から脱出しなければならない。憎悪は愛によってのみ克服される。憎悪に対する憎しみをもつてすることは、ただ憎悪を深め、その範囲をひろげるだけである」(「ハリジヤン」一九四六年七月七日号、森本達雄著「人類の知的遺産 64 ガンディー」講談社より)と訴えております。

二十一世紀に入ったその年、二〇〇一年九月十一日にアメリカを襲った同時多発テロの直後、SGI会長は、『我々が打ち勝たなければならない悪』と題する論文を発表しております。その中で、SGI会長は、「人類は長きにわたって、憎しみが新たな憎しみを生み、報復が新たな報復をまねく『憎悪の連鎖』を繰り返してきた」と指摘し、『憎悪の連鎖』を切断するために、

アヒンサー(非暴力)がおかれております。そして釈尊は、宇宙生命の究極を「法」(ダルマ)としてさし示したのであります。仏教者は、アヒンサー(非暴力)を第一に、五戒、八正道や大乘仏教における六波羅蜜の慈悲行によって、宇宙生命の「ダルマ」を体現しようとしたのであります。

ガンジーは「真理のあるところにはまた、真の知識があります」「また、真知のあるところには、つねに『アーナンダ(歓喜)』があり(中略)真理は永遠ですから、そこから汲み出される歓喜も永遠です」(一九三三年「イエラヴァダー・マンディルから」より、前掲書所収)と述べております。

仏教においては、宇宙根源の「法」に真実の「智慧」がそなわり、その体現は永遠なる「歓喜」をもたらすと説いております。

このように、ガンジー主義と仏教を基盤とする池田思想の説く「非暴力」「慈悲」という「善性」は、深く宇宙の究極に根ざしており、それ故に、いかなる障害があろうと、それを乗り越えるべく無限の智慧と歓

ガンジーと同じく、人間生命に内在する「善性」「魂の力」——非暴力、慈悲、愛、創造性——の開発を「本質的な解決」として示されております。そのためにも、あらゆる次元の重層的な「文明間対話」の必要性を主張しております。

非暴力、慈悲等の「人間の善性」を信じ、開発を促していくところに、ガンジー主義と池田思想に通底する根本的な方法論が提示されているのであります。

では、このような「魂の力」をいかに開発していくのか——その点をめぐって、私は、ガンジー主義と池田思想に内包された四つの共通項を抽出してみたいと思います。

第一に、両者のとなえる「非暴力」「慈悲」という「善性」は、深く、宇宙生命の究極に根ざしている点であります。周知のごとく、ガンジーは、宇宙の究極を「真理」(サチャ)と表現し、その把握(グラハ)への方途として、アヒンサー(非暴力)をはじめとする倫理的・道徳的実践を力説したのであります。仏教においては、五戒という倫理的実践の第一には不殺生戒即ち

喜と愛が沸き起こってくるのであります。

第二に、両者の共通項としてあげられるのは、「非暴力」の視野が、テロ、紛争、戦争という「直接的暴力」のみならず、その広大なる底辺をなす、「構造的暴力」「文化的暴力」にまで及んでいることでもあります。現代世界における構造的暴力、文化的暴力には、人権抑圧——特にジェンダーの問題、貧富の格差の増大、ある種の文化・文明・宗教に名をかりた差別、暴力の肯定等があり、その暴力性は文字通り「人間の安全保障」を脅かしていきます。さらに、自然に対する暴力性は、地球的・人類的規模の環境破壊を引き起こすのであります。「非暴力の戦い」とは、これらのすべての分野への持続的・重層的な慈悲・愛の実践となるのであります。

それ故に、第三には、「非暴力・慈悲」の実践は、個人の生命変革を基盤としながらも、社会変革、世界平和、正義の確立へと向かわざるをえないのであります。日蓮大聖人は、「立正安国」と表現しました。

生命変革と社会変革との関係については、大別して、

二つのベクトルが考えられます。一つは、社会変革を成し遂げることによって生命変革を可能にしようとする方向性であります。そして、もう一つは、生命変革を原点として、そこから社会変革へと向かう方向性であります。ガンジー主義も池田思想も、第二の方法論、即ち、生命変革から社会変革へと向かうのであります。非暴力、平和の観点からいえば、個人の「善性」の開発による「心の平和」を源泉として、あらゆる社会次元の暴力性に挑戦して、「社会平和」を成し遂げていくのであります。

人類社会の平和への志向性は、同時に「生態平和」（環境平和）を可能にするのであります。そのために、ガンジー主義も池田思想も、ともに、人類社会、自然環境へと深く広く関わっていかざるをえないのであります。

両者ともに「平和教育」を重視しておりますが、それには当然、人権教育、環境教育も含まれております。例えば、ラマチャンドラン博士の創立されたガンジークラム・ルーラル大学では、新入生は「シャンティセ

ナ」の活動を行い、社会の具体的活動を通して平和教育を行っております。SGI会長の創立された日本の創価大学、アメリカの創価大学でも、「世界市民」の育成をめざすとともに、そのために、地域に深く関わった活動を展開しております。

SGIは、文化活動、平和活動として、例えば、今日参加されている青年、女性平和委員会のメンバーは、平和教育を機軸に、人権、環境、反戦出版等の活動を繰り広げております。また、これはガンジー主義の戦いにも共通することですが、ある種の文化・文明・宗教にもとづく偏見や憎悪を乗り越えるために、他のあらゆる領域の方々と「文明間対話」「宗教間対話」を繰り広げております。SGIは、現代における大乘菩薩道を実践し、非暴力、慈悲の活動を社会、世界に展開する団体であります。

さて、これまでの三つの項目にわたる共通項を貫いて脈動する根本精神が、師弟論であります。師弟共戦の中で、師の精神が弟子へと伝えられ、師の理想と使命が弟子の理想と使命となって伝えられていくのであ

ります。師ガンジーと、あの有名な『朝のインタビュー』で出合った弟子のラマチャンドラン博士の師弟の

共戦、反英帝国主義の非暴力運動は、ガンジークラム・ルーラル大学の精神・理念となって受け継がれ、さらに弟子である「委員会」の方々の血肉となって伝えられております。この師弟の絆の中に、ガンジーの精神と実践が、現代に即応しながら伝えられ、展開しているのであります。

SGIにおいては、ガンジーと同時代に生きた初代牧口会長の日本軍国主義との「精神の戦い」が、師と共に牢に入った第二代戸田会長に受け継がれ、今日、第三代池田会長の戦いの中に、その全貌を現しているのであります。師弟の絆こそ、「真理」「法」の体得をめざす「非暴力・慈悲」の実践の肝要であり、文字通り、その「魂」であります。

最後に、私の心奥に、今も響いてくるラマチャンドラン博士の言葉があります。それは、「なぜ人間が人間を殺さなければならないのか——第二次世界大戦に流された血はガンジスの流れよりも多く、私達は二度と

この悲惨な歴史をくり返してはなりません。私達は『獣』ではなく『人間』であります」との博士の「叫び」でありました。

本日、このシンポジウムに参加した私達は、ラマチャンドラン博士の崇高な精神を継ぐものとして、「獣性」の「暴力」の支配するこの現実世界への、「非暴力・慈悲」に輝く「人間」としての果敢なる挑戦によって、『平和と非暴力の世紀』を創出しゆく方途、共戦の道をとともに開拓していきたいと念願しております。

（かわだ よういち／東洋哲学研究所所長）